

デフリンピックで考える

今月の25日（火）から後期人権旬間が始まります。ここでは、人権の大切さについて「デフリンピック」を題材に考えていきます。

デフリンピックとは、英語で「耳がきこえない」という意味の「デフ（deaf）」とオリンピックを組み合わせた「耳がきこえない・きこえにくい人のためのオリンピック」のことです。100周年の記念大会が東京を会場に今月15日から始まります。東京大会には、熊谷市に縁が深い選手もいます。そのお一人が、熊谷市在住のデフバスケットボール日本代表選手の丸山香織さんです。3歳の時から音がきこえづらくなり、現在は、ほとんどきこえないそうです。高校時代にはバスケットの強豪校に在籍し、全国大会で活躍していました。高校卒業後 デフバスケットを始め、多くの国際大会で素晴らしい成績を残しています。世界のトップ選手です。その丸山選手を講師としたデフバスケットボール体験会が先日開催されました。その体験会には、希望する女子バスケットボール部員が参加しました。体験会では約2時間、「会話をしない。声を出さない」というルールで練習を行ったそうです。身振り手振りやアイコンタクトで自分の意思を伝えなければいけません。参加者の一人、吉野さんは、「より周りを見なくてはいけないと学んだ」「人生経験としても参加してよかった」と感想を教えてくださいました。このお話を聞きながら、10年ほど前に体験したブラインドウォークを思い出しました。ブラインドウォークとは2人1組で、1人がアイマスクを着用し、もう1人がサポートして、校内（階段なども含む）を回る体験活動です。ブラインドウォーク体験の目的は何なのでしょう？その時の講師の先生（その先生も視覚障害がありました）から私はとても大事なことを教わりました。私は、目的は「目の見えない人の気持ちを体験すること」と思っていました。特に階段等では、恐怖心も感じます。でもそれは正解ではないのだと先生はおっしゃいました。正解は「正しいサポートの仕方を学ぶこと」です。先生は補足するように、「『正しくサポートできれば、視覚障害者も晴眼者と同じように生活することができる。生活を楽しむことができる』ということを理解することが本当の目的です」と教えてくださいました。デフバスケットの例に戻りますが、聴覚障害のある選手が自ら行う工夫（手話やハンドサイン）もあります。丸山選手は、全てをプラスに変えて「『見てわかるコミュニケーションの迫力』を楽しんでほしい」とデフバスケットの魅力を語っています。それでも、選手の努力、工夫だけでは十分ではありません。デフバスケットでは、選手へのサポートを「フラッグマン」置くことで実現しています。審判の笛の音などの代わりに、コート上の隅にいるフラッグマンが旗を振ることで、選手に情報は伝わります。他のスポーツ（例 水泳や陸上）でも適切なサポートさえあれば、競技を続け、楽しむことができます。東京 2025 デフリンピックを契機に「手話」の理解の広がりに期待する声もあります。手話は、耳が聞こえないことを補い、相手の個性や違いを認め、理解し、尊重するための手段です。人には、みな、苦手なことやできないことがあります。そんなときには、手を差し伸べ、助け合う気持ちが大切なのだと思います。